様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 6 月 28 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2009
課題番号：１９５００５０６
研究課題名（和文）　佐々木賢太郎の体育教育実践とその変容

研究課題名（英文）　The transformation process of Kentaro Sasaki's Physical Education Practices.

研究代表者
石田　智巳（ISHIDA TOMOMI）
立命館大学・産業社会学部・准教授
研究者番号：90314715

研究成果の概要（和文）：
本研究は，佐々木賢太郎の体育教育実践観の形成過程と変容過程を実証的に明らかにすることを目的とした。分析の対象は，佐々木と佐々木が所属した紀南作文教育研究会のメンバーによって書かれた資料を中心にして，特に佐々木の生活綴方や認識のとらえ方の変化を明らかにした。対象時期は，1952 年に勤務していた白浜中学校，岩田中学校，朝来中学校，佐々木－瀬畑論争が起こる 1961 年に勤めていた南部中学校での実践報告である。

研究成果の概要（英文）：
The purpose of this research is to clarify the formation and the transformation process of Kentaro Sasaki's physical education practices and theory.Based on the materials written by him and the members of his "Kinan Sakubun Kyoiku Kenkyukai (Kinan Essay Writing Workshop)", I analyzed the changing of his ways of thinking to "Essay Writings" and "Cognition".
Practice reports I analyzed was written when he worked for Shirahama Junior High School, Iwata Junior High School, Asso Junior High School, and Minabe junior high school .

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	500,000	150,000	650,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
2009 年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総　計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：体育授業、体育と認識
科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学，身体教育学
キーワード：佐々木賢太郎，生活綴方，教育研究運動，生命を守る体育，認識の節

１．研究開始当初の背景

戦後和歌山県紀南地方に起こった生活綴方教育運動の中心的役割を担った佐々木賢太郎による体育実践と，その成果が，戦後の体育の道標となるべく果たした役割は計り知れないほど大きい。それは，戦後の学校体育の歴史を語る教科書のほとんどに佐々木の名前と

その教育実践が紹介されていることからも窺える。しかしながら，没後10年以上経った今もその足跡が体系的に整理されているとは言えない。その理由として，「子どもの生活の現実に立脚する」「生命を守る」「からだづくり」「認識を重視する」「全面発達」など佐々木の構想した体育理念はあまりにも壮大であったことがあげられる。さらに言えば，先行研究においてそれら壮大な理念の形成過程において佐々木が所属した紀南作文教育研究会（以下，紀南作教）が与えた影響に踏み込めていないことがあげられる。

そのため，佐々木を紹介する先行研究では『体育の子』実践としてひとまとまりにされているのが現状であることが学術研究上の問題点である。

２．研究の目的

このような問題状況において，筆者はこれまでに当時の紀南作教の機関誌『紀南教育』や佐々木によって作られた『体育研究』などから，佐々木の実践観の形成や変化の過程を実証的に明らかにすることを試みた。これらの研究において焦点を当てたのが，紀南作教の動向であった。

これらの研究において対象とした時期は，紀南作教（の前身）が設立された1951年9月から佐々木が「生命を守る体育」を主張した1953年秋頃までの白浜中学校時代であった。

ところで，佐々木自身は「1954年，佐々木賢太郎はのちに『体育の子』に集約した授業実践を展開している」（佐々木，1969）と述べているように，1954年というのは佐々木の実践において重要な年であることがわかる。一方，佐々木は所謂佐々木－瀬畑論争の当事者としても知られている。この論争は，1960年に佐々木がバスケットボールの「ドリブル学習」において，認識を重視した実践を報告したことからはじまる戦後体育科教育における初の実践論争であったといわれる。佐々木が子どもの認識を重視するのはこの時期よりも前のことであるが，なぜこの時期に「認識の節」を強調したのかの経緯は実証的には明らかになっていない。

したがって，本研究の対象とする時期，そして研究の目的は以下の通りである。1954年4月から赴任する岩田中学校，朝来中学校，そして佐々木－瀬畑論争が起こる1961年頃までの実践を研究対象として，佐々木の体育観の形成過程ないしは変容過程を実証的に明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

まず，すでに収集した1954年3月までの資料をもとに，佐々木の生活綴方的教育方法に対する見方や考え方がどのように変化するのかを記述し意味づける。その際に，同時代の『教師の友』や『教育』，『作文と教育』といった雑誌や『山びこ学校』や『山芋』などの文献，あるいは紀南作教の機関誌である『紀南教育』からの影響についても明らかにする。

次に，1954年度から1961年度までの資料収集及び，その時期までの佐々木の生活綴方的教育方法に対する変化を記述し意味づける。

最後に，佐々木が体育実践において認識を重視するようになる過程を明らかにする。対象とする期間における佐々木の実践における変化，特に教材となるスポーツ種目の取り扱い方や変化について記述する。

４．研究成果

１）『体育の子』時代の生活綴方・認識へのまなざしの変容

表1 『体育の子』全19話の時代別順

順番	タイトル		出典	実践の年月	勤務校
1	第十一話	ひろたかの記録	『紀南教育』7.8号，1952年10，12月	1952.4	白浜
2	第九話	ルールは守るだけでよいか		1952.11	白浜
3	第三話	六郎のピストル	『教師の友』1953年7月号	1953.2	白浜
4	第十七話	おくれた子をみんなで		1953年1学期	白浜
5	第十二話	てつぼう運動のなかで	『紀南教育』13号（1953年9月）	1953年1学期	白浜
6	第十九話	肩をくみあう子どもたち	『教育』1954年6月号	1953.9	白浜
7	第十三話	五感の実践活動	『紀南教育』16号（1954年1月）	1953.11	白浜
8	第十八話	バスケット・ボールで学ばせる		1953.11	白浜
9	第六話	けん遊びの歴史性	『体育教育』14号（1954年1月）	1953.12	白浜
10	第七話	王様おとしの階級性	『体育教育』14号（1954年1月）	1953.12	白浜
11	第八話	ローすべりをして学んだこと		1954	岩田
12	第五話	からだのこと，挨拶のこと		1954	岩田
13	第四話	けんかの学習		1954.9	岩田
14	第十話	巾とびの中の子どもたち	『紀南教育』20号（1954年10月）	1954	白浜＆岩田
15	第十四話	「みんなで守り合えば」		1954	岩田
16	第二話	佐市の日記から	『体育科教育』1955年2月号	1954.4～11	岩田
17	第一話	岩夫たちは問題児だろうか	『紀南教育』22号（1955年6月）	1955.4～12	岩田
18	第十五話	ボール・ゲームの四つの話	『紀南教育』23号（1955年7月）	1954.11～	岩田
19	第十六話	喜美子の柔軟体操		1955	岩田

（1）実践の時期区分と生活綴方・認識

表1は，『体育の子』の全19話を実践の時代別に並べ替えたものである。以下には，白浜中学校時代を 1953 年の夏までと秋以降にわけ，また農村の岩田中学校時代の3つの時代に区分し，それぞれの時代の典型的な実践を挙げ，その特徴を見ていく。

（2）佐々木の生活綴方・認識への変化

白浜中学校時代1（1953 年夏まで）では，綴方によって生活をリアルに見つめさせることや共通の運命観を育てるような集団作りが主たる目的であった。そして，教師が子どもを知るために綴方が用いられていた。一方で，問題解決学習における反省的思考の影響も受けたような形で実践をしていた。

綴方によって子どもの悲惨な現実を見出した白浜中学校時代2（1953 年秋頃から）では，集団作りとともに教科の目標として「体を強くし」「生命を守る」ことが明確にされていく。それと同時に，認識論的には，問題解決学習における反省的思考からリアリズムの認識論へと変化していく。その境が第 12 話「てつぼう運動のなかで」にみられ，次の 13 話「五感の実践活動」で実践が報告されていく。この時期の特徴は教科指導型の実践報告が見られたことである。ただし，運動技術を認識対象としているわけではないことも特徴である。

岩田中学校時代では，それらに加えて，「生活の現実」に立脚しながら，その現実を成り立たせている社会（政治，家庭，地域）の矛盾に目を向けて，それを変革の対象にしていくという目的を設定していることが読み取れる。岩田では，体育とは直接関係がないと思われるような話が繰り広げられているが，佐々木においてはすべてつながっているのであった。なぜならば，トレパンが買えない現実（第 1 話「佐市の日記から」）も，働かなければならない現実も，盗みをしなければならない現実（第 2 話「岩夫たちは問題児だろうか」）も，それらを変えていかない限り，佐々木が目指す「生命を守る」「体を強くする」「集団を作る」「魂を育てる」ことにならないからである。また，被差別部落を校区に持つ学校であったこともあり，一部の親や子どもは抑圧された状況があった。そんな中で，部落に入っていって親も子どもも権利主体として育てようとしていた。そのため，報告は教科指導型ではなく，生活教科融合型にならざるを得なかったと思われる。

ところでこの時期に佐々木は認識を重視した実践を発展させている。第 15 話「ボール・ゲームの四つの話」は，ホッケーの授業の記録に2つの特徴が現れている。

一つは，ホッケーのスティックを作るときに，まず子どもたちがそれぞれに作ってきて，それら作ったものを批評しながら，再度もっともよいと思われるものを作り直すという手順を踏んでいることである。これは当時生活綴方でよく行われた，子どもに書かせたものをもとに集団で批評し，書き直しさせて認識を深めていく方法と重なる。19 話「肩を組み合う子どもたち」のタンブリング指導では，綴方を用いた生活指導と教科指導が集団づくりを目的に統一されたが，ここでは認識を深

めるという目的に集団が利用され，ここに両者が統一されているのである。

もう一つは，ボールを選ぶときの方法である。このときは，松かさ，里芋，鉄の小玉，石，スポンジボール，軟球，ピンポン球などを持ってこさせ，それをティーム毎に実際に打って，からだのためにふさわしいボールを選ぶという作業を行っていることである。白浜中学校時代の実践のように，既製のスポーツに子どもを当てはめるのではなく，子どものからだにふさわしいスポーツを作るという意図が見える。さらに，認識にかかわっていえば，実験的に行わせて，比較（照合）するという科学的な方法がとられているのである。

紀南作教が生活綴方とならんで，歴史教育の方法と科学教育の方法を学ぶことを主張していたことを思い出せば，佐々木はそれらの方法を取り入れ，体育に通用する生活綴方的教育方法を発展させたといえるのである。ただし，やはりここでも技術指導の内容や方法は出てはこず，「からだのため」になるかならないかというプラグマティックな立場を貫いている。

実際には『体育の子』の刊行直後に，「体育するための技術としての『なわとび』」（佐々木，1956b）という教科指導型の報告がなされている。それでも「佐々木のいつも言うのは，生活指導や，綴方らのせている」（佐々木，1956b）と仲間にいわれたからであり，生活体育を目指すこの時期の佐々木の関心は特に「生活」にあったと思われる。

2）「認識の節」について

1960 年 8 月の実践報告に「発見，照合，確認，創造」という「認識の節」という考え方が出てくる。この「認識の節」は，戦後初の体育科教育実践論争といわれる佐々木－瀬畑論争の論点の一つでもあったが，この意味と経緯を明らかにする。

（１）「認識の節」の経緯

もともと生活綴方を研究する会として出発した紀南作教は，紀南の現実に即した教育研究を行うことを目的に掲げていた。その現実の一つが被差別部落の存在であり，観念的な責善教育（和歌山県では人権教育や解放教育，同和教育のことを指す）や，責善教育を特設単元として教えることに反対した。そして，真鍋（1954）は「解放教育（責善教育）の基盤と内容」（以下，「解放教育の」）において，「見つけ出す教育」「認識さす教育」などを主張し，生活綴方を責善教育の結合を軸とした教科教育への展望を示している。つまり，責善教育の特設単元化への反対は，各教科の指導の中でそれを行うということでもあり，そのため責善教育を含めた生活指導と教科の指導をどのように統一するのかという問いが提出されたのであった。

1958 年には和歌山県でも勤務評定闘争が起こり，同年の学習指導要領の改訂は，それまでの単元学習を否定し，教科の中味を系統的に指導することを要求した。また，道徳の時間が特設された。これら教育の国家主義化への反対運動は 1959 年にまで及ぶが，その年の 8 月の紀南作教の合宿研究会（栗須川集会）において，真鍋は「教育運動としての紀南教育」と「教育作用としての紀南教育」というサークル運動の二側面についての提案を行う。

「われわれは，今まで行ってきた生活指導のなかで，子どもたちの認識，思考を育てることが如何に大切であるかを学んだ。・・・・われわれが生活指導のなかで獲得した方法を，教科指導のなかで適用して，・・・，よりたしかに，よりすじみちだて，よりこまかく教科指導によって得させようということである。」（真鍋，1959．8）

つまり，「認識の節」とは，生活綴方をベースとした生活指導を研究する会が，教科指

導をどのようにして方法的統一をもって研究していくのかという点から到達した教育方法なのであった。

3）佐々木の「認識の節」への道

次に，紀南作教にとって 1950 年代の到達点ともいえる「認識の節」に佐々木がどう関わっているのかについて見ていきたい。

（１）「解放教育（責善教育）の基盤と内容」について

すでに確認したように，1952 年に生活綴方を志した佐々木は，当初問題解決学習の反省的思考の認識論の影響を受けていたが，1953 年にはリアリズムの認識論へと変化させていくのであった。同年秋には「保健の時間」（五感の実践活動）や「バスケットボールで学ばせる」（ともに，『体育の子』所収）など，五感（官）での感覚を重視した教科指導型の実践報告がなされている。真鍋の「解放教育」は 1954 年 1 月の『紀南教育』16 号付録所収であるが，佐々木の「保健の時間」は 16 号そのものに報告されたのである。そして，「解放教育」には，まさに佐々木の授業で展開されたのと同じような授業風景の描写がなされており，影響の強さを見ることができる。

（２）『体育の新しい授業』（1959）の実践報告について

この時代は佐々木が朝来中学校に勤務していた時代（1956 年 4 月から 1959 年 3 月）にあたる。この時代の特徴は，教科指導型の報告と生活指導型の報告がはっきりと分かれている点に求められる。そして，教科指導型の報告の特徴は，「保健の時間」で使われた五感を通した「見つけ出し」と，各自の「発見」を持ち寄って「照合」する方法が，陸上，徒手体操などの教材でも用いられている点にある（佐々木，1959）。

（３）教育の国家主義化への批判

勤務評定闘争は紀南作教のメンバーのなかにも逮捕者が出るほどの激しいものであった。これを機に，佐々木の国家主義的教育への批判が展開されるようになる。1960 年の実践報告（佐々木，1960．8）もまた，指導要領批判からきているのであった。そこでは，主として指導要領が「何のために」という目的を欠如させて教材を指導することへの対する批判が中心であった。

（４）グループ学習への批判

佐々木においてはじめて４つの「認識の節」が出てくるのは， 1960 年 3 月の『新体育』（佐々木，1960．3）においてである。この内容は真鍋（1959）の論文とほぼ同じである。この真鍋論文はタイトルが「体育の新しい授業形態」となっており，「認識の節」はそれまで主流の学習形態，すなわちグループ学習を批判するものとして出されているのであった。そのことは，「最初に，『体育における人間像を問題にしなければならない，グループ学習を否定する』（和歌山）という発言があり」という記述があります（p.228）。また，「グループ学習は公式主義，機会主義に陥っている，子どもの悩みや喜びはどこかに行っている」（和歌山）という批判は，批判それ自体はよいとしても，具体的な資料を提示しての批判であって欲しかった」（『第八集　日本の教育』上巻・教科領域，日本教職員組合編，国土社，1959 年 6 月）にもあらわれている。

このように，1958 年の勤評闘争以降，佐々木は国家カリキュラムである学習指導要領や教育行政へと対決姿勢を強めていく。ただし，一方で日教組の教育研究集会においても，当時主流のグループ学習を批判するのであった。ここには，対教育行政という構図ではなく，地方対中央という対立構図が現れてお

る。そして，結果的に，やはり地方対中央という形の「佐々木－瀬畑論争」へと発展することになるのであった。いずれにせよ，「認識の節」は他者を必要とする学習形態を含んだ紀南教育の方法として世に問われることになったのであった。その意味で，佐々木瀬畑論争はグループ学習論争に発展してもおかしくはなかったし，瀬畑が所属した学校体育研究同志会の今日の到達点である異質協同で探求型のグループ学習の基礎もまたここにあるといえるのである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 4 件）
①石田智巳，運動文化論と「身体能力」体育科教育学研究　第 24 巻　第 1 号，2008，pp.19-24
②石田智巳，学習指導要領への期待とその体制への不安, 体育科教育, 第 56 巻 6 号, 2008, pp.44-46
③石田智巳,「体育と子どもの認識」に関わる研究, 体育科教育, 第 57 巻 5 号, 2009, pp.26-27
④石田智巳，体育で言語活動の重視をどう考えるのか，広島大学附属小学校　学校教育研究会編『学校教育』，№1111，2010，pp.6-11

〔学会発表〕（計 2 件）
①石田智巳，佐々木賢太郎の体育教育思想形成に関する研究－『体育の子』時代の生活綴方・認識へのまなざしの変容，日本教科教育学会（宮崎観光ホテル，宮崎），2008
②石田智巳，佐々木賢太郎の体育教育思想形成に関する研究Ⅱ－認識の節が意味するもの－, 日本教科教育学会（金沢大学・石川）, 2009

６．研究組織
(1)研究代表者
石田　智巳（ISHIDA TOMOMI）
立命館大学・産業社会学部・准教授
研究者番号：90314715